

キャラクター名
夜桜 依光 (ヨザクラヨリミツ)

プレイヤー名

シンドローム	エンジェルハイロウ	ワークス	何でも屋	カヴァー	高校生
	パロール				
オプション	ブラックドッグ	年齢	16	性別	男
覚醒	命令	衝動	憎悪	初期侵食率	33%
出自	待ち望まれた子	経験	消せない傷	邂逅	恩人

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	30
肉体	0	1	2			3	行動値	12
感覚	4	0	0			4	(非装備時)	12
精神	3	0	1			4	戦闘移動	17
社会	1	0	0			1	全力移動	34

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	1		射撃			RC		3	交渉		
回避	1	1	知覚	1		意志			調達	1	
運転:			芸術:			知識:			情報: 噂話	1	1
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
アルカナスレイヴ	RC	4r+3		+5		コンセントレイト:エンジェルハイロウ, 主の右腕, 光の月のコンボ

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ
強化服	1	1			

所持品	
思い出の一品(魔法少女ステッキ)	
コネ:UGN幹部	

合計装甲: 1 合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ	消費
時使い(クロノトリガー)	P	N		
テレーズ・ブルム	P 誠意	N 恐怖		
死んだ姉2人	P 遺志	N 悔悟		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 4 残り財産P: 4

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果: 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果: コスト分のHPで復活								
コンセントレイト:エンジェルハイロウ	2	2	メジャー	-	-	-		
効果: クリティカル値下げる								
主の右腕	4	2	メジャー	-	-	シンドローム		
効果: エフェクト組み合わせで攻撃力上がる								
光の弓	1	1	メジャー	視界	単体	RC		
効果: なんかビームみたい								
灰色の庭	2	2	セットアップ	視界	単体	自動		
効果: 行動値上げるぜよ								
球電の盾	2	2	オート	至近	自身	自動	-	
効果: ガード!ガード!								
黒星粉碎	4	4d10	メジャー	視界	範囲(選択)	自動	120%	
効果: [LV+5]D点のHPダメージ。リアクション不可。								
魔王の玉座	★	-	常時	至近	自身	-	-	
効果: 空中浮遊って魔法少女っぽいよね								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

歴史が長く由緒正しい名家の長男として生まれた。当時の夜桜家は女兒(姉2人)しか生まれておらず、待望の男児が生まれたことに家族は歓喜した。厳しい祖父と両親の教育を耐えられた唯一の癒しは、姉達と過ごした時間だった。姉達は親の目を掻い潜りながら彼と甘いものを食べたり、ファッションを楽しんだりしたのだ。その中で彼が特に好きだったのは魔法少女のアニメを観ることだった。強く優しい魔法少女が、悪を成敗する姿が彼の憧れになることは必然だった。そんな暮らしが突如崩れる。家に侵入してきた人間(たぶんジャーム化したやつ)が家族を殺して回った。姉達は彼を守るために押し入れに彼を閉じ込めた。数十分、いや、数時間経った時、そっと押し入れが開かれた。そこにいたのは数名のUGNエージェントとテレーズ・ブルムだった。彼女らと共に変わり果てた家を出る際、血がべっとりと付着した室内と転がる家族だったモノを見た。厳しかっただけの両親と、支えてくれた姉達と別れる時間も少ないまま彼はUGNに保護されたのだ。

それから数年、彼は何でも屋としてUGNに手を貸すようになった。彼の憧れであった魔法少女に近づくために、自分と同じ様な悲劇を繰り返さないために、今日も彼は町を飛ぶ。

「愛と正義の名の元にい…魔法少女、ティターニア見参！」

【依光の過去】
事件当時、僕は10歳だった。祖母と母はやって来た怪物に体を引き裂かれた。今は祖父と父が怪物に立ち向かっている。本当は僕も立ち向かわなきゃいけないのに、夜桜家の長男として誰よりも強くあらねばならないのに、僕は姉達に手を引かれ、押し入れに押し込まれた。
「早くここに隠れて！ 化け物が来る前に！」
「でも、月代姉ちゃんと星代姉ちゃんは…」
「私達は大きすぎでここに入れないわ。だから蔵まで走る。…大丈夫よ、依光。あなたは強い子。」
「でも、あの怪物、すぐそこまで来て…」
「めぞめそしない！ それでも夜桜家長男か！」
星代姉ちゃんが僕の肩を掴む。涙の止まらない僕に姉ちゃん達は続ける。
「依光、あんたはこの一族の中で誰よりも強い。親父や母さんの厳しい言いつけを耐えられるの、あんたぐらいいかないよ。だからこんな所で泣くな。」